様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 12 日現在

機関番号：12401
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：22520788
研究課題名（和文）日本の農村における人口の質的変化とルーラル・ジェントリフィケーションの進展
研究課題名（英文）Population Changes and Rural Gentrification in Rural Areas

研究代表者
山本　充（YAMAMOTO MITSURU）
埼玉大学・教養学部・教授
研究者番号：60230588

研究成果の概要（和文）：都市からの人口流入の過程と流入者が農村に与える影響を“ルーラル・ジェントリフィケーション”の概念を用いて明らかにすることを目的とした。東京大都市圏縁辺部における農村リゾートである軽井沢において、移住者は観光客として軽井沢を体験し、インターネットを通した情報収集を通して軽井沢に移住した。軽井沢の景観、環境に惹かれて移住した彼らの軽井沢における行動が、軽井沢の景観、環境の維持に貢献する、すなわちルーラル・ジェントリフィケーションが進展している可能性がある。

研究成果の概要（英文）：The objective of this studyr is to clarify the process of population inflow from cities to rural areas, and the impact of the new arrivals on rural areas, using the concept of “rural gentrification.” In Karuizawa, a rural resort on the outskirts of the Tokyo Metropolitan Area, the migrants experienced Karuizawa as tourists, and migrated to Karuizawa after gathering information through the Internet. There is a possibility that the behavior in Karuizawa of these people who migrated there because they were attracted by its scenery and environment is contributing to maintaining the scenery and environment of Karuizawa, in other words, that rural gentrification is progressing.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：人文地理学
キーワード：農村地理学

１．研究開始当初の背景

都市化・工業化の進展とともに、農村では、一方で人口流出に伴う高齢化や農地利用の粗放化、他方で都市住民の流入による混住化の進展や農地の都市的土地利用への転換など、農村社会や農村景観において負の現象が生じてきた。地理学を含む農村研究においても、こうしたマイナスの現象を把握することが行われてきている。しかしながら、近年では、農家が居住を継続し、都市からの流入者が農村生活を開始することで、景観やインフラを含めた良好な農村環境が維持されている地域も生じつつある（Irmen and Blach,1997;Schmied,2000）。その背景には、

農家の所得向上と生活意識の変化や、農村移住者の価値観とそれに伴う行動が、従来からの農村環境を維持するだけではなく、これまで以上の水準の環境を求めることがあると考えられる。こうした居住者の質の変化によって、農村の性格は今大きく変革しつつある時期にある。

こうした人口変動に伴う農村の質的変化は、欧米においても既にみられ、近年、その現象を「ルーラル・ジェントリフィケーション」として把握する試みがはじまっている。ルーラル・ジェントリフィケーションとは元来、田園生活を希求して都市から農村へ中産階級が移住することで、社会環境や自然環境に大きな変化が、とりわけその質的向上がもたらされることを指す概念である。彼らの購買力の高さや要求水準の高さが、彼らの住宅地とその周辺環境の美化をもたらすだけではなく、行政サービスの向上や高水準の商業サービス機能の立地も可能とし、農村環境の維持に繋がることとなる。ルーラル・ジェントリフィケーションは、単に農村の社会面や自然環境面にとどまらず、行政や商業、農村景観までをも含み、農村の質的変化を包括的・総合的に示す概念として捉えることもでき、今日の日本農村の質的変化を把握する上で有効である。そして、そこでは、農村の景観や環境が、都市住民にとって魅力的な「商品」としてみなされているという点で、ルーラル・ジェントリフィェーションは農村の商品化の一側面として捉えることができる。

こうしたルーラル・ジェントリフィケーションが日本のどこでどのよう形態で展開しているのか、その実態を把握することは、将来の農村のあり方を考える上でも意義のあることである。すなわち、農村人口にどのような質的変化が生じ、それに伴って農村景観や非農業的機能の立地、農村行政にどのような変化がもたらされているのか、さらにはこれら諸変化がどのように相互に連関しているのか明らかにされなければならない。

２．研究の目的

本研究は、日本における農村人口の質的変化、すなわち旧来の農村居住者の就業変化と農村への新規居住者の流入を把握した上で、こうした質的変化が、農村景観や非農業的機能の立地、農村行政にどのような影響を与えているのか評価することを目的とする。その際、「ルーラル・ジェントリフィケーション」の概念を用いることで、農村の持続性に寄与するようなポジティブな影響・変化を抽出するとともに、それらを諸外国における農村変化の一般的傾向の中に位置づけることを試みる。

３．研究の方法

まず、日本全体というマクロレベルで、小単位地区の統計データをＧＩＳによって解析し、人口変動とそれに伴う農村変化、その背景を評価することを試みる。その上で、事例地域を抽出し、ミクロレベルで、ルーラル・ジェントリフィケーションの展開プロセスを把握する。ここでは、フィールドワークを行うとともに、テキストマイニングツールによる解析を用いる。以上から、ルーラル・ジェントリフィケーションの特質と意義を考察する。

４．研究成果

(1)東京大都市圏縁辺部における逆流的人口移動

2000 年から 2005 年における東京大都市圏の人口動向をみると、東京区部およびその周辺における人口増加が顕著であり、バブル崩壊後の地価下落に伴う人口の都心回帰がみてとれる。また、近県の県庁所在地周辺において人口増加がみられ、大都市圏における都市への人口集中が進展していることがわかる。一方、都心から 50km 圏を超える地帯に位置する市町村は、こうした県庁所在地周辺を除いてはおしなべて人口減少を示しており、東京大都市圏においても農村から都市への人口流出が継続しているといえる。

しかしながら、こうした人口が減少する農山村地域の中で人口が増加している地域が島状に存在する。それは東京都心から 100km 程度に位置する那須野ヶ原周辺、軽井沢周辺、富士五湖周辺などである。これらは、東京大都市圏縁辺部においてリゾートとして位置づけられ、都市住民向けのホテルやペンションなどの観光施設、セカンドハウスの建設が進展した地域である。その良好な景観や環境がリゾートの形成に寄与し、リゾート形成を通して整備されたインフラが、こられ地域の商品的価値をさらに増大してきたと考えられる。

(2)軽井沢における人口流入プロセス

①高原リゾート「軽井沢」の形成

軽井沢町は、長野県の東端、浅間山の南麓斜面の標高 900～1,000m の高原に位置する。８月の平均気温は 20.3℃であり、東京のそれよりも７度近く低い。上越自動車道ならびに北陸新幹線によって東京と良好なアクセスを有し、東京大都市圏をマーケットとする有数のリゾート地を形成している。

こうしたリゾート形成の契機は、明治期になって日本に流入してきた西洋人による別荘の建設にある。1888 年、カナダ人 A.C.ショーが軽井沢で初めての別荘を建設する。その後、外国人が続々と軽井沢を訪れ、別荘が建てられるようになっていった。やがて外国人ばかりでなく、華族や政財界の有力者や文人など日本人によっても別荘の建設が進められる。別荘の建設は、大正期の好景気によっても促された（佐藤・斎藤、2004)。

第２次大戦後の高度経済成長に伴い、軽井

沢における別荘建設はさらに進展することとなる。別荘に加え、ホテル・旅館、保養所、スポーツ施設が建設され、より広い層が軽井沢を訪れるようになった。とりわけ、皇太子ご成婚が軽井沢への関心を高めた（内田、1989）。

その後、バブル経済、そして、1993 年の上信越自動車道の開通と 1998 年の長野行新幹線の開通によって、観光開発が進展するとともに、東京大都市圏からの時間が短縮されることで、都市部から軽井沢に移り住んで定住する層が出現するようになった。軽井沢町と隣接の御代田町においては、1970 年代以降、一貫して人口が増加しており、とりわけ 2000 年以降の軽井沢において、その増加の割合が上昇している。

こうした人口増加は、人口流入によってもたらされたものであり、人口ピラミッドの変化をみると、男女とも５０歳代、６０歳代の流入が顕著であることがわかる。すなわち、定年退職を迎えたいわゆる団塊の世代が退職を機に軽井沢へ移住する層を形成している。第 2 次大戦後の第 1 次ベビーブーム時代に生まれたこの世代は、総人口の約５％を占め、 過半が東京などの大都市地域に居住している。しかし、多くは農村地域に生まれ、勉学や仕事のために都市域に移住してきた人々である。彼らの定年時における移住先の一つとして軽井沢が選択されている。

②新規流入者の移住決定と定住化

軽井沢に都市部から流入してくる人々は、どのような過程を経て、移住の決定をし、軽井沢へ流入してくるのだろうか。勤務する会社の保養所に来るなど、一時的に観光客として訪れたことがあることが端緒となっている。軽井沢は、すでによく知られた保養地、観光地として多くの別荘や保養地の立地をみており、観光客として軽井沢を体験した層も数多い。そして彼らは、一時的な滞在にせよ、単に一度だけではなく繰り返し訪れており、その中で軽井沢の体験をより深めているようである。こうした繰り返しの訪問は定住の前準備ともいえ、全く知らない土地ではないことが移住へのハードルを低くしているともいえる。こうして軽井沢を深く体験した人々の中から定住を決定する層が現れてくるわけである。

続いて、移住を決定した層は、軽井沢で実際に不動産を探し、そして取得する。そこでは、インターネットを用いた物件探索が行われており、また、実際に軽井沢へ定住した人が開設しているブログを参考としている点が興味深い。こうしたブログは、軽井沢への移住と軽井沢における生活の実態を伝えており、移住希望者に対して有益な情報や指針を提供し、移住への道しるべとなっている。これはまた、いわゆる連鎖移住の一形態ともいえよう。インターネットによる情報収集を経て、実際に不動産を取得する際には、やはり現地の不動産業者に依存することになる。候補地を見て回ったり売買したりすることは現地に出向いて行われることであり、これは通常の居住地選択の過程で行われるのと同様である。

③新規流入者の移住決定要因

こうした都市部からの流入者が、移住を決定した第一の要因として、軽井沢が多様な面で「高品質」を提供していることが挙げられよう。高級避暑地、高級別荘地としてのイメージのみならず実際に質の高さを軽井沢は有しているといえる。そして、リゾートとしての質の高さは、恒久的な居住地としても高い商品的価値をもつことになる。

浅間山を仰ぎ見るカラマツ林の高原、そして点在する瀟洒な別荘群は、住んでみたいと思わせる魅力的な自然景観であり文化景観である。また、高原ならではの冷涼で過ごしやすい夏の気候ももつ。美しい自然景観・文化景観と過ごしやすい自然環境が移住を促進することとなる。

こうした景観や環境を行政や住民も保全しようと試みてきた。軽井沢町全体が「浅間山麓景観形成重点地域」の指定を受けており、長野県景観条例にもとづき、建築物の建設に当たっては、届け出が必要で、自然環境への配慮が求められる。また、町でも、「マンション軽井沢メソッド宣言」、「軽井沢まちなみメソッド宣言」をだして、景観と環境への配慮をうたっている。さらには、住民間でも「景観形成住民協定」を結んで景観保全の試みを行っている。こうした意識の高い施策が質の高い景観と環境を守ってきたともいえよう。

質の高さは景観や環境面にとどまらず、経済面にもみられる。軽井沢では、富裕な別荘族や一時的ではあれ観光客が求めるニーズに対応した高品質なものやサービスの提供がなされている。スーパーマーケットにおいては、非常に幅の広い食材が売られており、東京におけると同様の買い物が可能となっている。食品に限らず、軽井沢駅前のアウトレットモールも多様な消費の機会を提供する。町には、和洋食を問わず、高級店が点在し、この点においても、都市に近い外食ができる。一時的滞在者向けに提供されてきた質の高いものやサービスの提供は、恒久的な居住者にとっても利用が可能なものであり、魅力的なものである。

そして、こうした質の高さの商品的価値をさらに高めているのが、新幹線と高速道路による東京とのアクセスの良さであろう。

(3) 軽井沢における新規定住者によるライフスタイル

①新規居住者の多様な居住形態

軽井沢に移住してきた人々は、どのような

生活を送り、また、軽井沢での生活をどのように評価しているのだろうか、彼らの軽井沢における意義、役割を考える上でも把握する必要があろう。

例えば、A氏（60歳代）は、定年を契機として、横浜から妻と移住してきた。彼らは、中軽井沢地区の別荘の建ち並ぶ地区に新たにログハウスを建てている。A氏は、ＩＴ企業を自ら設立し、週に３度は、新幹線で東京のオフィスへでかけ、残りは在宅で仕事をするという。在宅の間もインターネットを用いて東京のオフィスとは連絡をとっている。東京へ新幹線で通勤する間に知り合った仲間で「新幹線クラブ」をつくり交流を図っている。また、地元の人々も参加するゴルフクラブ Age Shoot Golf Club のメンバーでもある。また、妻が中心となって、畑を借りて耕作も楽しんでいる。A 氏は近隣の住民との交流も活発に行っている。

一方、1995 年に、御代田町との町界付近に開発された別荘地「オナーズヒル軽井沢」は、ゲートを有し、関係者以外の立ち入りが禁止されている。190 戸が分譲済みで、多くは都市部にも住居をもち、週末利用や季節的な利用など多様な利用形態がみられる。その中で、２７戸が定住しているという。利用者によるテニスサークルやゴルフサークルがあり、バーベキュー大会や星の観察会などが開催されるが、あくまでもこの別荘地内のメンバーのみによってなされるものである。

以上のように、同じように軽井沢に移住してきた人々でも、軽井沢のどこに居住するかに応じて、その生活の有り様や、旧来の住民との関わり方は多様である。とりわけ、軽井沢の地域社会に影響を及ぼす可能性のあるのは、上記例の前者のように、地元住民と隣接して住み、地元住民と交流のある層であると考えられる。以下では、テキストマイニング・ツールを用いて、新規居住者の開設するブログを解析することで、彼らのライフスタイルを評価することを試みる。対象とするのは、既存のコミュニティに隣接して生活する夫婦ｘと、ゲートのある別荘地内の夫婦ｙによる 2006 年１月から６月のブログである。

②新規定住者のライフスタイルと認知

まず、それぞれのブログにどのような単語がよく用いられているか、その頻度を、地名と普通名詞に着目して検討した（Yamamoto, 2006）。頻度の高さが関心の高さや活動の量を反映していると考えるからである。

コミュニティに隣接したｘのブログにおいて、最も使われている地名は軽井沢であり、ついでネパール、タイ、そして東京である。生活の場である軽井沢が話題の中心となっていることがわかる。また、この夫婦は、海外旅行が趣味であり、その行き先国も頻出する。そしてまた、かつての居住地である東京も意識されている。一方、ゲートのある地区のｙでは、軽井沢が最も多いのはｘと同じであるが、次いで東京が多い。東京が強く意識されていることが伺える。

次に、普通名詞についてみてみると、ｘにおいては、雪や雨、気温といった天候に関わる言葉が上位にきており、次いで、畑や仕事、花、庭といった屋外での活動を示唆する言葉が使われている。軽井沢において、庭や畑などで活動を行い、そこから天候に関心をもつ様子がうかがい知れる。一方、ｙにおいては、人や自己、感情、テレビ、我が家といった屋内、そして自分自身に関わる単語がよく使われている。軽井沢にいながらも屋外での活動よりも屋内にいつつ内省的で、ｘとは対照的である。このことは、コミュニティから離れたゲート内の別荘地に住むことから必ずしももたらされるものではなく、個人の特性であることはいうまでもない。

テキストマイニング・ツールでは、「共起性」として、ある単語とともに、その単語の近くでよく使われている単語を評価することができる。表２は、軽井沢という単語との共起性を示し、数値が高いほど軽井沢と同時に使われていることを意味する。

ｘでは、軽井沢とともに、思うや見る、言う、といった動詞が使われ、軽井沢において主体的に活動している様が彷彿される。また、気温、植物など軽井沢の自然を認識していることもわかる。先の名詞の出現頻度とあわせてみても、軽井沢の自然の中で野外において積極的に活動し、軽井沢の自然を満喫しているようである。一方、ｙにおいては、軽井沢とともに最も使われているのが、東京であり、次いで別荘である。軽井沢に生活しながらも、常に東京を意識し、東京に目が向いていることがわかる。別荘としての軽井沢という意識もうかがいしれ、完全に軽井沢に定住しているともいえない状況であるともみてとれる。また、ｘと同様に、雪や寒い、冬など軽井沢の自然を認識していることもわかる。

以上のように、軽井沢における新規定住者のライフスタイルや軽井沢の認知は多様である。しかしながら、軽井沢の自然環境や景観、そしてそのもとで庭仕事や畑いじりができることが軽井沢の魅力となっていることは否めず、それが定住希望者に対して軽井沢が提供する商品とみることができよう。彼らのブログが潜在的な移住希望者によって閲覧され、実際に移住の際に参考にされることを鑑みると、こうしたブログを通して、軽井沢の商品価値が広報されているともいえる。

(4)農村における新規居住者の役割：ルーラル・ジェントリフィケーション

軽井沢においては、都市部から団塊の世代を中心として人口流入がみられた。彼らはすでに観光客として軽井沢を体験し、インター

ネットを通して軽井沢の情報を収集して移住に至っている。軽井沢が移住先とされる要因として、魅力的な景観の存在、そしてそれを実現してきた行政側の政策、さらには、別荘族や観光客向けに提供されてきた質の高い財やサービスの提供がある。まさに軽井沢の持つ商品的価値が人口流入をもたらしてきたといえる。

そして、こうした軽井沢へ移住が可能な比較的富裕な層は、軽井沢において彼らのライフスタイルを実現しようとし、その活動を通して、周辺の環境や景観を維持・向上しようと試み、かつ行政にも影響を与える可能性をもっている。また、彼らの購買力をもってして、質の高い財やサービスの提供も持続的に行われることとなる。このような流入者による農村空間の質的向上を、ルーラル・ジェントリフィケーションとして把握することができよう。こうしたルーラル・ジェントリフィェーションを通して、軽井沢の商品的価値はさらに高められることとなり、さらなる人口流入がもたらせることとなるかもしれない。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計３件）

1. 山本　充 2013. 砺波平野におけるプルリアクティビティの展開と土地利用変化. 田林明編著『商品化する日本の農村空間』農林統計出版, 167-178.

2. 山本　充 2013. 都市農村関係からきた農村空間の商品化の意義. 田林明編著『商品化する日本の農村空間』農林統計出版, 339-348.

3. 山本　充 2012. ハンガリー南部農村における農業生産協同組合の再編と個人農の動向. 小林浩二・大関泰宏編著『拡大 EU とニューリージョン』原書房, 222-235.

６．研究組織

(1)研究代表者

山本　充（YAMAMOTO MITSURU）

埼玉大学・教養学部・教授

研究者番号：60230588